

昔むかし、あるところに、ひとりの王子がいました。

ある日、王子は、リコッタチーズを食べているとき、ナイフで指を切ってしまいました。血のしずくがチーズの上に落ち、白いチーズに付いた赤い血がとてもきれいに見えました。

「白くて赤いこんなにきれいな娘がいたら、結婚したいなあ」と、王子は思いました。

そして、ミルクのように白くて血のように赤い娘をさがしに旅に出ました。小さなおの

で木を切ってつえを作り、どんどん歩いて行きました。

歩いて、歩いて、歩いて行って、夜になると、王子は大きなくりの木の下にやって来ました。木の上で、一羽のみみずくが、陰気な歌を歌っていました。

「おい、いやらしいみみずくめ。陰気な歌はやめてくれ」

王子はみみずくめがけておのを投げつけました。おのはみみずくに当たって、木のみきにさりました。みみずくは歌うのをやめました。

王子はまたどんどん歩いて行きました。

何日も何日も歩きましたが、ミルクのように白くて血のように赤い娘は見つかりません。王子は、さがしつかれて、城にもどることにしました。

あのかりの木の所まで来ると、木の根元に、ひとりのおじいさんが腰を下ろしていました。おじいさんには、片方の目がありませんでした。おじいさんは、王子に、話しかけました。

「わしの目を取ったのはおまえなんだよ」

王子は、おどろいて、

「わたしは、あなたの目を取ったりなんてしませんよ。あなたに会ったこともないんだから」といいました。

「いや、おまえはわしに会ったことがある。わしは、まほう使いにまほうをかけられて、みみずくのすがたになつていたんだ。おまえが、おのでわしの目を取ってくれなかったら、わしは永久にみみずくのままでいなくてはならなかった。だから、わしもおまえのために何かしてあげよう。いったい何をさがしているのだね」

王子はいいました。

「わたしは、ミルクのように白くて血のように赤い娘を見つけて、結婚したいと思っているのです」

おじいさんは、

「ではわしに付いておいで」といつて歩き出しました。

王子はおじいさんのあとから、歩いて、歩いて、歩いて行って、やがて、広い原っぱにやって来ました。そこにはオレンジの木がたくさんあって、よくうれた実がいっぱいなっていました。おじいさんは、

「さあ、あそこへ行つて、オレンジの実を三つ取っておいで」といいました。王子は、

そんなことをして何になるんだろうと思いましたが、オレンジの木立の中に入っていると、実を三つつみました。そして、おじいさんの所にもどるとちゅうで、オレンジをひとつ、むいてみました。すると、いきなり、ミルクのように白くて血のように赤い娘があらわれました。王子が驚いていると、娘は、

「眠いの」といいました。王子はどうしていいか分かりませんでした。すると、娘は、いきなり消えてしまいました。

「とんでもないことをしてしまった」と、王子は思いました。

王子は、おじいさんの所にもどって来て、

「オレンジをひとつむいてしまったんです。そうしたら、ミルクのように白くて血のように赤い娘が出て来たんだけど、眠いといったきり、すぐに消えてしまいました」といいました。おじいさんは、

「しようないやつだ。わしのゆるしもしないにむいてはいけなかったんだ」といいました。

それから、おじいさんと王子は、王子の城に向かいました。ところが、とちゅうで、王子はがまんできなくなつて、こっそりふたつ目のオレンジをむいてしまいました。すると、また、ミルクのように白くて血のように赤い娘があらわれました。前よりもっと美しい娘でした。娘は、

「お腹がすいているの」といいました。王子がどうしていいか分からないうちに、娘はいきなり消えてしまいました。

王子が急いで追いつくと、おじいさんは、

「もうひとつのオレンジはどうしたんだ」とききました。

「どうにもがまんできなくて、むいてしまったんです。そうしたら、ミルクのように白くて血のように赤い娘が出てきて、お腹がすいたといったきり、すぐに消えてしまいました」

「しようないやつだ。わしのゆるしもしないにむいてはいけないといったじやないか」

ふたりは、歩いて、歩いて、歩いて行って、やっと、王子の城に着きました。おじいさんは、王子に、りっぱな部屋と飲み物を用意させました。そして、その部屋で最後のオレンジをむくようにといいました。王子がオレンジをむくと、前の娘たちよりもっと美しい、ミルクのように白くて血のように赤い娘があらわれました。娘は、

「のどがかわいているの」といいました。王子はすぐに飲み物を飲ませました。娘はこんどは消えませんでした。おじいさんは、

「これがおまえの花嫁だ。わしの目をとってくれたお礼だよ」といって、どこかへ行つてしまいました。

王子は、ミルクのように白くて血のように赤い娘と結婚しました。ふたりは幸せでした。

ある日、王子は、森へ狩りに出かけました。お妃は、城のバルコニーで髪をとかしていました。すると、バルコニーの下の泉に、年とった魔女がせんたくをしにやって来ま

した。魔女は、水に美しい娘がうつっているのを見て、

「みんなはわたしのことをみつともないっていうけど、わたしはこんなに美しいんだ」と思いました。けれども、よく見ると、それは自分のすがたではありません。魔女は、バルコニーを見上げました。すると、ミルクのように白くて血のように赤いお妃が髪をとかしていました。魔女は、

「わたしは髪をとかすのがとても上手なのよ。わたしがとかしてあげましょう。もつと美しくなりますよ」といいました。お妃は、

「ではお願いするわ。どうぞ、上がって来てくださいな」といいました。

魔女は、すぐに階段を上がって行き、お妃の髪をとかし始めました。そして、いきなり、まほうの針をお妃の頭にさしました。たちまちお妃は、つばめになって飛んで行ってしまいました。魔女は、

（永久にここに住みついてやろう）と考え、部屋をしめ切ってベッドに入り、魔女だと気付かれないように、頭から毛布をかぶりました。

召使いの女が朝ごはんを持ってきて、まどを開けようとすると、魔女は、毛布をかぶったまま、

「まどを開けないでちょうだい。風に当たると気分が悪いから」といいました。

王子が狩りから帰ってくると、お妃のすがたがありません。召使いの女にたずねると、お妃はまどをしめたまま、まだベッドにいと答えました。王子は心配になって部屋に行ってみましたが、お妃に化けた魔女は、どうしてもベッドから出ようとしませんでした。

あくる日、召使いの女が夕食のしたくをしていると、台所のまどべにつばめが一羽飛んできて、

「王子さまはどこかしら」とたずねました。召使いが、

「美しいお妃さまとお部屋にいらつしやるよ」と答えると、つばめは、いいました。

「わたしも昔は美しかった。でも今はつばめでいなければならないの。わたしに食べ物をくださいな。そうしたら、わたしの金の羽をあげましょう」

召使いは、食べ物を皿に入れてまどべに置きました。つばめはそれをぜんぶついばむと、金の羽を一枚、皿に置き、飛んで行ってしまいました。

召使いは、金の羽を王子の所に持って行きました。王子は、

「なんて美しい羽だろう。わたしもそのものいうつばめを見たかった」といいました。

魔女は、ベッドの中から、

「そんな鳥なんか見なくていいわ」といいました。

つぎの日、召使いの女が夕食のしたくをしていると、またつばめが飛んできて、

「王子さまはどこかしら」とたずねました。

「美しいお妃さまとお部屋にいらつしやるよ」

「わたしに食べ物をくださいな。金の羽をあげましょう」

召使いは、食べ物を皿に入れてまどべに置きました。つばめはそれをぜんぶついばむ

と、金の羽を一枚、皿に置いて、飛んで行ってしまいました。

召使いは、金の羽を王子の所に持って行きました。王子は、

「なんて美しい羽だろう。わたしもそのものいうつばめを見たかった」といいました。

魔女は、

「そんな鳥なんか見なくていいわ」といいました。

三日目、また、まどべにつばめが飛んできて、

「王子さまはどこかしら」とたずねました。召使いが、

「美しいお妃さまとお部屋にいらつしやるよ」と答えると、つばめは、いいました。

「わたしも昔は美しかった。でも今はつばめでいなければならないの。わたしに食べ物をくださいな。金の羽をあげましょう」

召使いは、食べ物を皿に入れてまどべに置きました。そして、すぐに王子に知らせに行きました。王子が急いで台所に来てみると、つばめはせつせと食べ物をついばんでいました。王子は、

「ああ、なんて美しい鳥なんだ」といって、つばめの頭をなでました。すると、何か固いものが指に当たりました。引きぬいてみると、それは、魔女の針でした。針を引きぬいたとたん、つばめのすがたは消えて、そこにミルクのように白くて血のように赤いお妃が立っていました。

悪い魔女は、火あぶりにされました。

王子とお妃は、今でも、城で幸せに暮らしています。

原話…『イタリアの昔話』剣持弘子編訳／三弥井書店

再話…村上郁